

「空襲警報に殺された」

神谷 勉子(かみや やすこ) 55歳

私は昭和43年生まれ、現在の55歳。なので、戦中どころか、戦後のどさくさの記憶もない。ただ、おばあちゃん子だった私が、祖母から繰り返し聞いた「私のおばさん」の話をしてみたい。

私の母は、4人姉弟の次女で、弟が二人いる。長女の「私にとってのおばさん」は、戦争中8歳のとき結核で亡くなった。だから、私はその「おばさん」に会ったことはない。

祖母はいつも言っていた「逆縁の不幸だけは、したらあかんのやで。一番の親不孝やで」

戦争中、敵機が迫ると「空襲警報——」とサイレンが鳴る(と聞いた)。すると、小学校から子どもたちが一斉に下校。「解除——」といわれると、また学校に行く…。

一日に何度も繰り返される、この空襲警報にまつわる頻回の登下校。

おばさんは、体があまり丈夫でなかった。警報が発令される中、近所の子供たちはみんな帰ってきているのに、娘はなかなか帰ってこない。だいたいぶたつたころ、やっと下駄の音がゆっくりと聞こえてきた。やがて「あーしんど…」と、帰ってきて、上がり框に腰を下ろした。とたんに「解除——!!」休む間もなく、また出ていく。下駄の音がゆっくり遠ざかる…。もともと体力がないのに、一日に何回もこれがあって、くたびれ果てていたようだ。

祖母はこの話を私にしながら「だから、戦争に殺されたようなもんや」とつぶやいた。

夏休みには、ずっと祖母宅にいた。だから、お盆は一緒にお墓参りに行く。けれど、不思議な約束事があって、私は決してお墓の掃除などの手伝いはさせてもらえず「転ばないように」とお寺の隅に座らされていた。

「お墓で転ぶと死ぬ」という迷信を、祖母は信じていて、それは「あの子もお墓でこけたんや」とのこと。

だから、大事な孫は、もう絶対に、連れていかれないように、転ばないように、座らせておく。私も、掃除などすべての雑事が終わって、手を合わせることができるまで、蚊に食われながら待っている…。

私の夏の思い出…。